The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	六条院崩壊の論理 ： 『源氏物語』若菜巻における
Author(s)	藤井, 由紀子
Citation	詞林. 2001, 30, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67472
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

六条院崩壊の論理

―『源氏物語』若菜巻における―

藤井　由紀子

はじめに

『源氏物語』若菜巻は、従来、光源氏の運命が暗転していく第二部の始発の巻として、その主題や方法が様々な角度から議論されてきた。たしかに、若菜巻に至って、物語の主調は明らかにそれまでとは異質なものへと変化し、紫の上の発病、柏木・女三宮の密通事件、六条御息所の死霊の跳梁、と、事態は陰惨の一途を辿り、光源氏の栄華の頂点を描いたと言われる藤裏葉巻とはまったく対照的な様相を呈しているように思われる。しかしながら、言われるところの「六条院の崩壊」とは、いったい何であったのか。その内実は、登場人物の苦悩や寂寥といった内面世界のみに収斂されるものではないだろう。

六条院の崩壊は、蹴鞠の場面から始まるとされる。本稿では、その蹴鞠の場面におけることばを詳細に検討することによって、六条院凋落の起因を探っていくこととする。[1]

一　蹴鞠の場の「乱れ」

第二部において、光源氏の栄華を突き崩す最大の原因が、柏木と女三宮の密通事件であることは異論のないところであろう。その密通事件の発端とも言うべきは、若菜上巻に描かれる蹴鞠の場面にあった。唐猫によって引き開けられた御簾の内に、柏木は女三宮の姿を見、「心にかかりておぼゆ」（若菜上　一三四頁）というその執着が、やがて密通事件を起こすまでに高まっていったことは周知の通りである。さて、その蹴鞠の場面には、次のように、多くの「乱る」「乱りがはし」ということばを見出すことができる。

・大将の君（＝夕霧）は丑寅の町に、人々あまたして鞠もてあそばして見たまふ、と聞こしめして、源氏「乱れがはしきことの、さすがに目さめてかどかどしきぞかし。いづら、こなたに」とて御消息あれば、参りたまへり。
（若菜上　一二九頁）

・をさをさ、さまよく静かならぬ乱れ事なめれど、所がら

人柄なりけり。　（若菜上　一三〇頁）

・容貌いときよげになまめきたるさましたる人（＝柏木）の、用意いたくして、さすがに乱りがはしき、をかしく見ゆ。　（若菜上　一三一頁）

・大将の君（＝夕霧）も、御位のほど思ふこそ例ならぬ乱りがはしさかなとおぼゆれ、見る目は人よりけに若くをかしげにて、……　（若菜上　一三一頁）

・柏木「花乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」　（若菜上　一三一頁）

様々な位相で使われる「乱る」は、夙に、「この段に再三用いられる「乱り（れ）がはし」の語は、単に蹴鞠の有様についていうのではなく、六条院の秩序を根底からゆさぶる事態の到来を暗示しているのではないか」[2]と指摘されているように、一種の禍々しさを感じさせるものであった。蹴鞠の場の禍々しさについては、原岡文子氏による「散り乱れる桜の中で、一種の狂気とも呼ぶべき、恋の熱が柏木に取り憑いたとみるべきか。それは又、花の散る頃にはびこる悪霊の仕業だったのか」[3]という言、あるいは、松井健児氏による「こうした霊的なものを呼び込む力が、あるいは蹴鞠という遊戯それ自体に内在していたのだと見ておきたい」「人の住む建物の前には、なにもない空間が必要なのであり、（中略）「なにもない」場所とは、じつは「なにものか」がいる場所でもあっただろう」[4]という言に象徴されるように、従来、霊的なものとの接触という観点で考察されてきた。しかし、「乱る」ということばの持つ禍々しさ・ゆゆしさは、もっと別の何かと深く連動しているのではないか。

『源氏物語』には、数多くの「乱る」「乱りがはし」「思ひ乱る」などのことばが存在する。これらをもちろん一纏めにすることは不可能なのだが、顕著な特徴として、「物の怪」の現象が描かれる場面に使われることが多い、ということを指摘することができる。

たとえば、葵巻、六条御息所の生霊事件。

a 斎宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。　（葵　一六頁）

b 御息所は、ものを思し乱るること年ごろよりも多く添ひにけり。　（葵　二四頁）

c（御息所は）かかる御もの思ひの乱れに御心地なほ例ならずのみ思さるれば、他所に渡りたまひて御修法などせさせたまふ。　（葵　二七頁）

d「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける」となつかしげに言ひて、

物の怪　なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへ

り。　（葵　三三頁）

御息所は、日頃から、源氏の訪れが間遠なことに対して「思し乱」れていたのだが（a）、葵祭りの車争い以降、その「思し乱」れることが募っていき（b）、御修法をさせるまでとなり（c）、遂に生霊となって葵上に取り憑くこととなる（d）。いわば、物の怪発動のメカニズムと御息所の「乱れ」は、不可分のものとして結びついており、「乱る」ということばはdの物の怪の和歌の「空に乱るるわが魂」に顕著なように、人間の心性を超え、魂そのものを揺さぶるほどのゆゆしさを有したことばであったことを押さえておきたい。

それは、物の怪に「なる」側の人間だけに言えることではなかった。物の怪に「憑かれる」側の人間の心情にもまた深く関わることばであったのである。

（鬚黒北方は）親の御あたりといひながら、今は限りの身にて、たち返り見えたてまつらむこと、と思ひ乱れたまふに、いとど御心地もあやまりて、うちはへ臥しわづらひたまふ。　（真木柱　三五〇頁）

物の怪に憑かれていた鬚黒の北方は、鬚黒と玉鬘との結婚に際して、患うほどに「思ひ乱れ」ることとなる。

また、やはり物の怪に憑かれて小野で療養していた一条御息所の場合。

なほ、いかがのたまふ、と気色をだに見むと、心地のかき乱りくるるやうにしたまふ目押ししぼりて、あやしき鳥の跡のやうに書きたまふ。　（夕霧　四一二頁）

娘落葉宮と夕霧が通じていると誤解したその心境は「かき乱りくるる」と表現され、やがてその「乱れ」は、御息所の命を奪うこととなったのであった。

これらの例は、物の怪そのものによって乱されたというよりは、常に物の怪によって病んでいた状態が、思いがけない事態に遭遇することによってさらに悪化していく様子を「乱る」ということばによって表現したものと考えられようが、先に見た六条御息所のケースも、車争いという、外部からの抗えない、なかば暴力的な力によって魂が乱されたという点において、鬚黒北方・一条御息所のケースと相通ずるものがあると言えるだろう。「思ひ乱る」という状態は、「つらし」「憂し」といった心性の問題を超え、精神の極限の状態、狂気とすれすれの状態を表しているのではないか。それがしばしば物の怪と連動するのは、もはや自分では制御しようのない魂の乱れに繋がるからであり、自身の内部の問題以上に、外部からの負の力の影響下にあるからに他ならない。

歌語としての「乱る」を検討された後藤祥子氏は、それを簡潔に「秩序あるものが他からの力が加わって散乱したり、束ねる力を失ってばらばらになる様子」[5]と纏められた。まさに「乱る」とは、「他からの力」によって、秩序を失うことを言うのであろう。あの蹴鞠の場に、霊的な他界の力を読み取った原岡氏・松井氏の論が思い起こされるところだが、し

かし、あの場を支配していたのは、そのような霊的なものだけであったのであろうか。いや、蹴鞠の場だけではない。若菜巻には、様々な「乱れ」が描かれていたのであり、それらを俯瞰した上で、その一連の流れの中に、蹴鞠の場の「乱れ」も位置づけられる必要があるだろう。いったい、若菜巻全体を支配する「乱れ」とは何であったのか。六条院の秩序を乱す「他からの力」とは何であったのか。

二　女三宮の機能

蹴鞠の場で女三宮を垣間見した柏木は、以後、狂気とも言える執心によって、女三宮と自身を破滅の道へと追い込んでいくのだが、その過程には、多くの「乱れ」を見出すことができる。柏木は、垣間見の後、女三宮に送った手紙の中で、その心境を次のように綴る。

柏木「一日、風にさそはれて御垣の原を分け入りてはべりしに、いとどいかに見おとしたまひけん。その夕より乱り心地かきくらし、あやなく今日はながめ暮らしはべる」など書きて、……　（若菜上　一四〇頁）

柏木は、女三宮の姿を見たことによって「乱り心地かきくらし」という状況に陥るのであって、以後、その「乱れ」に翻弄されることとなるのである。

まことに、わが心にもいとけしからぬ事なれば、け近く、なかなか思ひ乱るることもまさるべきことまでは思ひも寄らず、……　（若菜下　二一三頁）

小侍従をくどき、女三宮の寝所に忍び込んだ柏木には、密通を犯そうなどという思いはなかった。ただ、女三宮に近づけば近づくほど「乱れ」が増すことなど「思ひも寄ら」なかったのが柏木の誤算であった。

さかしく思ひしづむる心もうせて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばや、とまで思ひ乱れぬ。　（若菜下　二一七頁）

結局、女三宮に近づいた柏木は惑乱し、その思いを遂げてしまうこととなる。逢瀬の後、「聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す」（若菜下　二二〇頁）と、女三宮のもとを去らない魂を自覚していた柏木の「乱れ」は、柏木巻においても「いとどしき心地も乱るれば」（柏木　二八五頁）と決して終息することなく、やがて死へと至ることになったのであった。

たとえば、これを、源氏と藤壺の密通と比較するとき、源氏の心境は「心もあくがれまどひて」「つらうさへぞ思さる」（若紫　三〇五頁）などと表現されるものの、決して「思ひ乱る」とは表現されていなかったことに思い至る。柏木の「乱れ」は、禁忌の相手を恋う心情として一般的なものに還元されるべきではなく、柏木の女三宮への思いに固有なもの

だと言えるだろう。だとすれば、なぜ、これほどまでの「乱れ」が柏木に付着せねばならなかったのか。

ここで、若菜巻冒頭部を見たい。若菜巻は、朱雀院の長い逡巡から始まる。その詳細な検討は、秋山虔氏などによる先駆的な論考[6]に譲り、今、留意しておきたいのは、そこに若菜巻最初の「乱る」を見出すことができるということである。

朱雀院「しか思ひたどるによりなん。皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなる事も、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれど、かつは心苦しく思ひ乱るるを、……」

（若菜上　二六頁）

朱雀院は、鍾愛の娘女三宮の将来を憂い、その身の振り方を決めあぐねるのだが、その心境こそが「思ひ乱るる」と表現されているのである。しかし、朱雀院の「思ひ乱れ」は若菜巻全体を通して続くものではなく、やがて終息することとなる。

主の院（＝朱雀院）は、今日の雪にいとど御風邪加はりて、かき乱り悩ましく思さるれど、この宮（＝女三宮）の御こと聞こえ定めつるを、心やすく思しけり。

（若菜上　四四頁）

朱雀院は、元来病んでいた物の怪に加え、冬の寒さによる風邪をひき「かき乱り悩ましく」という状態なのだが、それは身体的な状況にすぎず、精神的には「心やすく思しけり」と、久しく心を占めていた「乱る」の状況から解放されている。それは、「この宮の御こと聞こえ定めつる」、つまり、女三宮の降嫁先が決まったからに他ならない。そして、それと一続きの文章で、朱雀院と入れ替わるように「思ひ乱る」のが、他でもない、光源氏その人であった。

六条院（＝源氏）は、なま心苦しう、さまざま思し乱る。

（若菜上　四四頁）

「心やすく思し」、「乱る」の状況から解放された朱雀院と、「なま心苦しう」思い、「さまざま思し乱る」源氏。両者は実に対照的であり、あたかも、「乱る」という状態が、朱雀院から源氏へと転移したかのような錯覚すら覚える。いや、それは、まさに転移したのだ。朱雀院と源氏、二人は何によって乱されているのか。それは、女三宮その人に他ならない。女三宮の降嫁先は、光源氏であった。源氏は、朱雀院から女三宮を譲り受けると同時に、その「乱れ」までをも引き受けたと言えるだろう。事実、源氏がその後も「思ひ乱れたまへる御心の中苦しげなり」（若菜上　五七頁）と「乱れ」続ける状況にあるのに対し、朱雀院は、紫の上などの動向を気にしつつも、以降、決して「思ひ乱れ」ることはないのである。朱雀院が、この後、再び「乱れ」るのは、やはり女三宮に関わる次の場面であった。

山の帝（＝朱雀院）は、めづらしき御事（＝女三宮の出産）

たひらかなりと聞こしめして、あはれにゆかしう思ほすに、かく悩みたまふよしのみあれば、いかにものしたまふべきにかと、御行ひも乱れて思しけり。

（柏木　二九三頁）

女三宮の出家に関する場面である。この後、朱雀院は、降嫁後初めて女三宮に対面することを考え合わせるに、女三宮とは、彼女に近接する者に、「乱る」という状況を付与する機能を有していると言えるのではないか。女三宮が六条院に降嫁した三日目の夜、紫上もまた「思ひ乱れ」ることになるのであった。

（紫上は）わざとつらしとにはあらねど、かやうに思ひ乱れたまふけにや、かの（＝源氏の）御夢に見えたまひければ、うちおどろきたまひて、……　（若菜上　六二頁）

紫上は、女三宮の存在が間近になって初めて「思ひ乱れ」、源氏の夢に現れることになったのである。

柏木物語に多用される「乱りがはし」ということばに注目された竹田誠子氏は「「乱りがはし」には、正常な世界から逸脱していく惑乱、破滅のイメージが醸成され」ていることを指摘され、柏木の女三宮への思いは、その始発から「（「乱りがはし」という語によって）決して既成権力を覆すことのできない閉塞性を、もともと担わされている」[7]と論じられている。しかし、今、若菜巻全体に通底する「乱れ」を考えるとき、それは、柏木その人の性質や心情に還元されるべきものではなく、むしろ、女三宮にこそ付随することばであることに気付かされる。柏木も源氏も紫上も、女三宮に近づくことによって、その「乱れ」までをも召喚してしまったのだ。池田節子氏は、女三宮を評して「彼女ほど負性的な性格を付与された人物はない」[8]と論じられたが、その「負性」を象徴することばとして「乱る」があり、従来様々に説かれてきた女三宮のマイナス的機能とは「乱る」ということばに集約されているとも言えようか。

「寝殿の東面」（若菜上　一二九頁）で始まった蹴鞠は、いつしか寝殿の南面へと移動していた。そこは、まさに女三宮の住む場所であった。蹴鞠の場を支配していた「乱れ」もまた、女三宮の負的な影響力によるものであったに違いない。女三宮こそが、六条院の秩序を乱さんとする「他からの力」であったのであり、六条院の崩壊は、柏木の狂気や六条御息所の死霊によって起こったものではなく、女三宮の「乱れ」によってこそ牽引されたものであると言えるだろう。

しかしながら、女三宮の降嫁から、蹴鞠の場面までには、一年ほどの時間の経過があり、その一年の間には、女三宮の「乱れ」がこれほどまでに六条院世界を支配することはなかった。なぜ、この蹴鞠の場面以降、女三宮の負的な影響力が甚大なものとなるのか。その真相は、蹴鞠の場面に置かれたもうひとつのことばを顧みるとき、明らかになる。

三　「静かなる」六条院の放棄

六条院崩壊の発端となった蹴鞠は、次の源氏のことばによって始められたものであった。

源氏「しづかなる住まひは、このごろこそいとつれづれに紛るることなかりけれ。公私に事なしや。何わざしてかは暮らすべき」などのたまひて、……

（若菜上　一二八頁）

源氏は、「しづかなる住まひ」である六条院の暮らしを「つれづれ」なものだ、と言う。そして、その「つれづれ」を慰めるために、人々を集めて行われたのが、あの蹴鞠であったのである。

ここで、六条院が「しづかなる住まひ」と呼ばれていることに注意したい。藤裏葉巻で源氏に与えられる准太上天皇位が、言われるような栄華の頂点などでは決してなく、源氏自身の「静かに籠りゐ」（絵合　三八二頁）る願望を叶えるためのものであったことは、以前論じたのでここには繰り返さない。が、だとすれば、「しづかなる住まひ」という六条院の在り方は、まさに源氏にとっては理想的な姿であったはずである。しかし、源氏は、その生活を「つれづれ」であると否定し、再び喧噪を求めようとする。なぜ、源氏は、「静かなる」六条院を放棄したのか。その理由を探るため、若菜巻をもう一度辿り直してみたい。

蹴鞠の場面に至るまで、若菜巻は、源氏の四十賀を中心とする様々な行事を描くことによって進められる。それらの行事は、藤裏葉巻までに六条院から離れていった人々、つまり、六条院の表層的な栄華をかつては担っていた人々によって行われていることに、まずは注目したい。源氏の四十賀は、玉鬘主催のものを皮切りに、紫上、秋好中宮、夕霧（冷泉帝）と行われるのだが、これらのうち、紫上以外の人々は、すべて、すでに六条院以外の場所に居を定める人々であったのだ。そのような人々によって行われる賀宴には、次にあげるような「昔」「いにしへ」の語をしばしば見出すことができる。

まずは、玉鬘主催の四十賀。

人々参りなどしたまひて、（源氏は）御座に出でたまふとて、尚侍の君（＝玉鬘）に御対面あり。御心の中には、いにしへ思し出づることども、さまざまなりけんかし。

（若菜上　四九頁）

久しぶりに玉鬘に対面した源氏は「いにしへ」を思い出す。この「いにしへ」は、もちろん、玉鬘が六条院にいた頃のことを指すのであろうが、その玉鬘を中心とした華やかな玉鬘十帖の世界が、実は、桐壺帝の御代を再現しようする過去に向かった栄華のベクトルの上に位置づけられることを思い出さねばならないだろう。その夜の賀宴には、はっきりと桐壺聖代を意識する次のくだりを見出すことができる。

琴は、兵部卿宮（＝蛍宮）弾きたまふ。この御琴は、宜

陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴を、故院（＝桐壺院）の末つ方、一品の宮の好みたまふことにて、賜はりたまへりけるを、このをりのきよらを尽くしたまはんとするため、大臣（＝頭中将）の申し賜はりたまへる御伝へ伝へを思すに、いとあはれに、昔の事も恋しく思し出でらる。（若菜上　五三頁）

この「昔の事」が桐壺帝の御代を指すことは動かない。源氏は、准太上天皇となった今なお、桐壺聖代への憧憬を捨てはいないのである。同様のくだりを、紫上主催の四十賀の記事にも見出すことができる。「未の刻ばかり」（若菜上　八七頁）に始まった賀宴で、柏木と夕霧が「入り綾をほのかに舞」（若菜上　八八頁）う姿に、思い起こされるのは、紅葉賀巻の朱雀院行幸のことであった。

いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕、思ひ出でたまふ人々は、権中納言（＝夕霧）衛門督（＝柏木）のまた劣らずたちつづきたまひにける、世々のおぼえありさま、容貌用意などもをさをさ劣らず、官位はやや進みてさへこそなど、齢のほどをも数へて、なほさるべきにて昔よりかくたちつづきたる御仲らひなりけり、とめでたく思ふ。主の院（＝源氏）も、あはれに涙ぐましく、思し出でらるる事ども多かり。（若菜上　八八頁）

そして、続く管弦の遊びの場面。

朱雀院より渡り参れる琵琶琴、内裏より賜はりたまへる箏の御琴など、みな昔おぼえたる物の音どもにて、めづらしく掻き合はせたまへるに、何のをりにも過ぎにし方の御ありさま、内裏わたりなど思し出でらる。（若菜上　八九頁）

ここでは「内裏わたり」と具体的な場所すら伴って、源氏の過去に対する思慕が繰り返し語られることになる。いわば、源氏にとっての栄華とは、過去への繋がりなくしては成り立たないものであったのである。様々な人々によって行われた四十賀は、源氏に「いにしへ」の桐壺聖代を再び思い起こさせる機能を有していたのであった。

しかし、源氏を過去へと繋ぐ人々は、賀宴が終わるやいなや、六条院からその姿を消してしまう。空洞化した六条院に次に人々が参集するのは、明石姫君の東宮出産の折であった。この場面にも、先の四十賀同様、様々な「昔」「いにしへ」が散りばめられている。しかし、その「昔」が指し示すものが、それまでの桐壺聖代を指す「昔」とは異質なものへと変化していることを見逃してはなるまい。

・かの大尼君も、今はこよなきほけ人にてぞありけむかし。（中略）年ごろ、この母君（＝明石君）は、かう添ひさぶらひたまへど、昔の事などまほにしも聞こえ知らせたまはざりけるを、この尼君、よろこびにえたへで参りては、いと涙がちに、古めかしき事どもをわななき出でつつ語りきこゆ。（若菜上　九六頁）

・（明石姫君は）げにあはれなりける昔のことを、かく聞かせたまはざらましかばおぼつかなくても過ぎぬべかりけり、と思してうち泣きたまふ。　（若菜上　九七頁）

出産を前にした明石姫君に、「ほけ人」である明石尼君は、その出生に纏わる「昔の事」を語り聞かせる。この場面に、源氏は登場しない。いや、登場できない、と言ったほうがよかろう。なぜなら、ここで語られる「昔の事」とは、明石一族の血脈を辿るためのものであったからである。三田村雅子氏は「ここに展開されるのは、父によって秩序づけられ、父によって組み合わされた養子・養女の空間であろうとする光源氏体制のほころび、裂目である」[9]と論じられたが、源氏の関与できない「昔の事」が、桐壺帝の御代を指す「昔の事」と入れ替わるように出現したことは、六条院と桐壺聖代との断絶を暗示しているとも言えるであろう。続いて明石入道からの手紙が開示されることにより、源氏はその一生までをも相対化されてしまうのであった。

そして、その直後に置かれたのが、他でもない、あの蹴鞠の場面であったのだ。もう一度、源氏の言を引こう。

三月ばかりの空うららかなる日、六条院に、兵部卿宮（＝蛍宮）衛門督（＝柏木）など参りたまへり。大殿（＝源氏）出でたまひて、御物語などしたまふ。源氏「しづかなる住まひは、このごろこそいとつれづれに紛るることなかりけれ。公私に事なしや。何わざしてかは暮らすべき」などのたまひて、源氏「今朝、大将（＝夕霧）のものしつるはいづ方にぞ。いとさうざうしきを、例の小弓射させて見るべかりけり。好むめる若人どもも見えつるを、ねたう、出でやしぬる」と問はせたまふ。（若菜上　一二八頁）

源氏の感じている「つれづれ」、それは、自身の支配下に置くことのできない「昔の事」の出現、そして、自分が求めている「昔の事」へと繋がる人々がいまや六条院にはいないという物足りなさに起因するものであったのではないか。源氏は、当初、蹴鞠をするつもりはなく、その「つれづれ」を解消するために、夕霧をこそ召し寄せようとしていたことに注意すべきであろう。夕霧は、源氏を過去へと繋げる重要な人々の中の一人であった。源氏が「しづかなる住まひ」を放棄してまで手に入れたかったのは、相対化された自己同一性（アイデンティティ）の回復であり、桐壺聖代という過去の栄華であったのだ。

しかし、源氏の思惑は、マイナスの方向に働くこととなる。そこに集ってきたのは「若君達めく人々」（若菜上　一二九頁）であり、源氏を過去へと誘ってくれる者はなかった。蹴鞠という遊び自体、それまでの物語には描かれることのなかったものである。その「静かならぬ乱れ事」（若菜上　一三〇頁）によって、六条院は最早「しづかなる住まひ」としての機能を完全に喪失してしまう。そこにこそ、女三宮の「乱れ」が伸張する原因があったのだ。「静かなり」と「乱る」がまったく正反対の語感を持つことばであることは言うまでもなかろ

う。「静かならぬ」六条院に残されるのは「乱れ事」のみであって、六条院崩壊の起因は、「しづかなる住まひ」を放棄した源氏の錯誤にあったのである。

おわりに

以上、若菜巻の「乱る」を辿り見ることによって女三宮の機能を考察し、源氏の「しづかなる住まひ」の放棄と照らし合わせ、六条院崩壊の原因を探ってきた。女三宮が藤壺と血縁関係にありながら、その影をいささかも宿さないのは、彼女が決して桐壺帝の時代とは繋がらない人物であることを如実に表していると言えよう。秩序ある六条院が、女三宮の登場によって崩壊していくことは、従来も様々に論じられてきたことであるが、「乱る」「しづかなる」ということばによって、その内実はより明らかなものとなったのではないか。「しづかなる住まひ」とは、六条御息所の鎮魂とも密接に関わることばであった。御息所の死霊跳梁の契機も、蹴鞠の場に見出せるのかもしれない。

だとすれば、若菜巻は、第二部という新しい世界の始発、というよりはむしろ、少女巻から続く六条院物語の終末、として位置づけられるべき巻であると言えよう。定説にとらわれることなく、今、物語の新たな枠組みを考えていかねばなるまい。

注

(1) 本稿は、以下の拙論に続くものである。併せお読みいただきたい。
「「静かなる」六条院—『源氏物語』藤裏葉巻の栄華の実相—」(『詞林』27 H12・4)
「『源氏物語』鈴虫巻の六条院—六条御息所の鎮魂を視座として—」(『中古文学』66 H12・12)

(2) 日本古典文学全集『源氏物語 四』(小学館) 一三二頁頭注

(3) 原岡文子「『源氏物語』の「桜」考」(『源氏物語両義の糸』有精堂 H3)

(4) 松井健児「蹴鞠の庭」(『源氏物語の生活世界』翰林書房 H12)

(5) 後藤祥子執筆「乱る」(『歌ことば歌枕大辞典』角川書店 H11)

(6) 秋山虔「「若菜」巻の始発をめぐって」(『源氏物語の世界—その方法と達成—』東京大学出版会 S39) など。

(7) 竹田誠子「「乱りがはしき」柏木—言語空間としての蹴鞠と脚病—」(『王朝文学史稿』21 H8・3)

(8) 池田節子「女三宮」(『物語を織りなす人々 源氏物語講座2』勉誠社 H3)

(9) 三田村雅子「明石からの手紙」(『源氏物語—物語空間を読む』ちくま新書 H9)

※本文の引用は、日本古典文学全集『源氏物語』(小学館) によった。

(ふじい・ゆきこ　本学大学院博士後期課程)